Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　63　pp 1～12　2008

デカルトの物心二元論再考[1]

立　花　希　一

Descartes' Body-Mind Dualism Revisited

Kiichi TACHIBANA

Abstract

Descartes (1596-1650) is the first figure who proposed body-mind dualism based on his own rational arguments, not based on any allegorical or philosophical interpretations of the Bible, which was primarily accepted as the absolute authority. In this paper I critically examine Descartes' arguments, and point out his wrong strategy, that is, *we ought to exclude as false all these things of which we may doubt.* I claim that Descartes' philosophical opinion is not the sole absolutely certain truth, and I propose another option.

キーワード：デカルト，物心二元論，懐疑と批判，聖書の文字通りの解釈，実体（基体）

Key words： Descartes, body-mind dualism, doubt and criticism, literal interpretations of the Bible, substance (substratum)

Ⅰ．まえがき

ユダヤ教，キリスト教，イスラム教に登場する唯一神の存在を認めている（信じている）日本人の数は，おそらく，ごく小数に限られているだろう。日本人のキリスト教徒は人口の１パーセント，120万人ほどといわれている。

しかしながら，少しデータは古いが，1997年の統計によると，世界の宗教人口60億人のうち，キリスト教徒20億人（その半数がカトリック教徒），イスラム教徒11億5000万人となっており，ユダヤ教徒を数に加えなくても，人間の約半数が唯一神論者である。残りの半数の中には，多神論者（例えば，ヒンズー教徒７億5000万人），無神論者（唯物論者），懐疑論者（不可知論者），さらには一神論と多神論の区別のつかない人，死霊・生霊等を信じている人が含まれるであろうが，どうも，世界の多くのひとが何らかの宗教的信仰をもっているようである[2]。

現在のわれわれの常識（？）では，物と心がまったく同じものだとは言えそうもないので，異なる点もあると考えるだろう。普通，われわれは石や鉄を物だとは言うが，心とは言わない。

人間に心があるとすれば，人間だけではなく，チンパンジーやイヌにもある程度，心はありそうである。では，ゴキブリは？アメーバやウィルスは？タンパク質は？タンパク質を構成する炭素，窒素，酸素，水素は？さて鉄や石は？

脳はどうだろうか。脳は物なのか，心なのか。物でもあり心でもあると言いたい気がするのは私だけだろうか。例えば，脳がなかったら心はないとか，心は脳の働

---

[1] 本稿は，秋田大学教育文化学部国際コミュニケーション講座の星宏人氏が主催する「英語学・理論言語学セミナー」の第13回（2006年12月）と第17回（2007年７月）に私が行った発表に基づいている。このような発表の機会がなかったら，おそらくこの論文は書かれていなかったと思われるので，発表の機会を設けてくださった氏に感謝したい。しかしながら，本稿に誤りがあるとすれば，当然，それはすべて私の責任である。

[2] 因みに，仏教徒は３億5000万人ほど存在するが，初期仏教（ゴータマ・シッダルタの教説）では，神の存在や来世の存在については「無記」の立場であり，懐疑論（不可知論）に含まれる。西洋で無神論者といえば，唯一神を否定する者のことである（多神論は相手にされず，即座に却下される）。しかしながら，古代世界にあっては，一神教を生んだ民族とされるイスラエルの民は偶像崇拝をしないので，周りの民族から無神論者とみなされていた（アンドレ・シュラキ，『ユダヤ思想』，文庫クセジュ，白水社，19ページ）。キリスト教，イスラム教の普及により，歴史的に一神論が少数派から多数派に転化したのである。

Akita University

きだとか，と言いたくなる。その一方で，眠気とたたかいながら勉強をするときなど，自分が自分の脳を働かせるようなこともしている。この場合，脳を働かせる自分（心）も，脳なのだろうか。脳とは異なる，脳を超越したものではないのか。あるいは，それすらも脳の働きなのだろうか。脳イコール心ではないとしても，少なくとも，身体，感覚器官，脳などの物質的基盤なくして心（精神，意識）はありえないのではないか。

近代における物心論はデカルト（1596-1650年）に遡る。かれは，物と心はまったく異質のふたつの実体だと主張した（物心二元論[3]）。その結果，デカルトの哲学は，この異質なふたつの実体が相互作用する（あるいは相互作用するようにみえる）のはどうして可能なのかという心身問題（哲学的問題）を生みだしてしまった。以後，この問題は，哲学者の間でおおいに論じられ，今日に至るまで論じられ続けている。本稿では，物心二元論を証明しようとしたデカルトの議論を批判的に検討することによって，問題点を明らかにし，物心二元論はデカルトがみなしたような疑いの余地のない絶対に確実な真理ではなく，別の選択肢もありうることを示したいと思う。

Ⅱ．デカルトの物心二元論

神経生理学者のA．ダマジオは，『デカルトの誤り』という本の中で，かれが誤りとみなすデカルトの主張を引用し，「これがデカルトの誤りである」と断定している[4]。

私は，次のことを知った。私はひとつの実体であり，その本質ないし本性は考えるということだけにあって，存在するためにどんな場所も要せず，いかなる物質的なものにも依存しない，と。したがって，この私，すなわち，私をいま存在するものにしている魂[5]は，身体〔物体〕からまったく区別され，しかも身体〔物体〕より認識しやすく，たとえ身体〔物体〕が無かったとしても，完全に今あるままのものであることに変わりはない，と。

精神が物体とまったく切り離されて独立に存在する実体であり，精神は物体なくしてもそのままあるという，このデカルトの主張（物心二元論および精神の物質に対する優位説）に誤りがあるとみなす点では，筆者はダマジオと同じ見解であるが，ダマジオは誤りの理由を述べず，そう断定するだけである（心理学，生物学，神経生物学，医学等の科学研究への悪影響は指摘しているが）。本稿において，デカルトの議論に即して検討を行い，デカルトがこの結論を導く議論の前提を特定し，その前提批判を行いたいと思う。

Ⅲ．デカルトの懐疑（感覚一般，物体一般の存在，数学の排除）およびその帰結

デカルトの議論を読んだことのある多くの読者の中で，デカルトの議論の前提を受容した者は，デカルトの議論を「なるほど，なるほど」と同意しながら読まれたのではないかと思われる。このような同意を再現すると，次のようになるだろう[6]。

---

[3] 二元論（dualism）と対照的な立場に，一元論（monism）や多元論（pluralism）があるが，二元論は西洋の伝統的な二分法（dichotomy）に連なり，その起源はピタゴラス学派に遡る。例えば，奇数と偶数，直線と曲線，男と女，右と左，光と闇，静止と変化など。奇数は奇数であって偶数ではないし，偶数は偶数であって奇数ではない。直線は直線であって曲線ではないし，曲線は曲線であって直線ではないと。デカルトによれば，物と心についてもこの二分法が当てはまる。物は物であって心ではないし，心は心であって物ではない，と。しかしながら，以上のような二分法は固定的で絶対的なものではない。例えば，生物学的性としての男と女の場合，一見すると，男は男であって女ではないし，女は女であって男ではないと言えそうであるが，実際には中間的で男と女のどちらでもない人間は存在するし，さらに，男も女も男性ホルモンと女性ホルモンの両方をもっており，まったく異質の存在ではない。さらに，二分法（分類）は唯一の一義的な基準によって決定されるものではなく，基準の取り方によって変わりうる。例えば，伝統的な動物分類学に従ってヒトとチンパンジーは別種とみなすことも可能であるが，ダイヤモンドが主張するように，ヒトをチンパンジーの一種（コモン・チンパンジー，ピグミー・チンパンジー（ボノボ），ヒト・チンパンジー）とみなすことも可能である。分類の有効性は目的に依存する。しかし，まったく自由に分類できるわけではなく，対象の性質に規定される側面もおおいにある。

[4] A. Damasio, *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, Vintage Books, London, 2006, pp. 247－50.

[5] ここでは，魂（âme）と訳されているが，精神（espri, mens）と同じものである。ここでは，精神（spirit）を用いる。「第五反論に対する著者の答弁，第二省察に対する反論について」，4，デカルト著作集2，白水社，431－2ページ，参照。

[6] 先に引用したデカルトの結論を導出する議論は，『方法序説』（1637年）だけではなく，『省察』（1641年）や『哲学原理』（1644年）においても同様の議論が行われている。『方法序説』だけではあまりに簡潔すぎるので，ここでは，それらを取り上げて，デカルトと素直な読者の間の問答の形式で，再構成することにしたい。但し，デカルトの言葉を引用した部分については，引用符をつけ，注で引用箇所を明記する。ここで言及した著作の訳書では，ego，jeについては，「私」，「われ」が，sum, existo，suisについては，「有る」，「ある」，「存在する」が使われているが，本稿では，「私」と「存在する」に統一した。また旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。漢字表記やひらがな表記もできる限り統一するように心がけた。

Akita University

デカルト：疑いを差しはさむ余地のまったくない絶対に確実な真理[7]の探究のためには，「ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部，絶対的に誤りとして廃棄すべき[8]」である。このような懐疑の過程を経た結果として，どこにも疑いを差しはさむ余地のないものが残るかどうかを見極めることにしよう。

素直な読者：了解した。

デカルト：疑うといっても，ありとあらゆる個別的な事柄を疑っていくことにしたら，きりがないだろう。例えば，赤いとか白いとかの個々の感覚（視覚），冷たいとか暖かいとかの個々の感覚（触覚），甘いとか苦いとかの個々の感覚（味覚）などひとつひとつを取り上げて，疑いの余地があるかどうかを検討していくことは不可能にちがいない。

素直な読者：なるほど，そうだ。

デカルト：そこで，個々の感覚ではなく，感覚一般を検討することにしよう。感覚はときどきわたしたちを欺くので，感覚はつねに正しいとは限らない。錯覚があるように。

素直な読者：その通り，感覚は確かに欺くことがある。

デカルト：では，感覚は疑いの余地があるのだから，感覚は絶対確実に真だとは言い切れない。感覚を排除することにしよう。

素直な読者：わかった。

デカルト：物体の存在はどうだろうか。ここでも個々の物体をひとつひとつについてそれが存在するかどうかと疑っていったら，きりがないので，物体一般を検討することにしよう。幻覚では，存在しない物体が見えたりする。われわれが本当に存在すると思っていることが絶対に幻覚ではないとは言い切れない。あるいは，睡眠時の夢に登場する人物や物体は，本当は存在していない。眠っておらず，目が覚めているときに見る物体は本当に存在すると普通，思っているが，覚醒時の現実世界が夢なのかもしれない。

素直な読者：夢と現実は違う。夢の中の物体は存在しないとしても，現実の世界の物体は存在するに決まっている。

デカルト：私は現実世界が夢だとは断定していない。夢かもしれないと疑っているのだ。「覚醒は睡眠からけっして確実な標識によって区別されることはできない[9]」からだ。覚醒時の現実世界が絶対に夢ではなく，現実世界の物体は確実に存在し，その存在を絶対に疑うことはできない，と断定できるかね。

素直な読者：それはできない相談だ。夢かもしれないと疑うことは私にもできる。

デカルト：では，覚醒と睡眠を明確に区別することができない以上，物体の存在も疑いの余地がある。物体の存在も排除することにしよう。

素直な読者：（しぶしぶながら）わかった。

デカルト：同意してくれたようだね。では，数学（代数や幾何）はどうだろうか。ここでも個々の計算や個々の図形の性質を取り上げて検討してもきりがないので，一例を挙げて検討し，その考察を数学一般の考察ということにしよう。

素直な読者：数学は確実だから，疑いの余地のあるものなどひとつもあるはずがない。どうぞ，それでやってくれてかまわない。

デカルト：では2足す3を取り上げよう。2足す3は5だろうか。

素直な読者：2足す3は5だ。これは確実だ。夢の中だって，2足す3は5だ。2足す3は5を疑うひとなどいるわけがない。逆に言えば，この計算がわからなかったり，疑ったりするひとは，単に数学をまったく知らないだけだ。2足す3が5ということは，古今東西，永遠の真理だ。疑いを差しはさむ余地はみじんもない。

デカルト：そうだろうか。この私が2足す3を行うそのたびごとに，誤るように，神はしたのかもしれない。すなわち，もしかすると，欺く神がいて，それがすべての人間を騙しているかもしれない，とは考えられないだろうか。本当は，2足す3は5ではないにもかかわらず，5だと思い込まされているかもしれないと。

素直な読者：そんなバカな。欺く神などいるわけがない。どこに存在すると言うのだ。

デカルト：私は欺く神が存在するなどと断定してはいない。存在するかもしれない，と疑っているのだ。欺く神など絶対に存在しないと断定できるかね。

素直な読者：絶対に存在しないとは言い切れない。存在するかもしれないと想像することはできる。

---

7 デカルトのように，「疑いを差しはさむ余地のまったくない絶対に確実な真理」を探究の目的にすると，後述するように，疑っている状態の存在以外のいっさいが排除されてしまうことになり，そこから一歩も先に進めなくなる。そこから脱出するためには，確実性（certainty）の探究と真理（truth）の探究を区別し，また主観的確信と客観的真理の追究を混同すべきではないと思われる。

8 『方法序説』，第4部，岩波文庫，45ページ。『省察』には，「意見のすべてを拒斥するのには，そのどれかひとつのうちに何らかの疑いの理由を私が見いだしさえすれば，それで十分であるであろう」とある。『省察』，第一省察，デカルト著作集2，白水社，30ページ。また，『哲学原理』には，「疑わしいものは虚偽と考えるべきである」とある。『哲学原理』，第一部，人間認識の諸原理について，二，岩波文庫，35ページ。

9 『省察』，第一省察，31ページ。

Akita University

デカルト：もし欺く神が存在したら，2足す3は5ではないかもしれないということになるね。疑いを差しはさむ余地がある以上，2足す3が5であることも絶対確実に真ではない。したがって，数学も疑いの余地があるので，排除しなければならないことになる。「神は，大地も，天空も，延長する事物も，形状も，大きさも，場所も，まったく何ひとつとして存在しないように，それでいてそれらすべてが，それでも，現在私にそう見えているものとたがうことなく存在していると私には思われるように，したのかもしれない[10]」のだ。だとすれば，普通，われわれが知識だと認めているものは疑いの余地があり，絶対に確実とは言い切れなくなった。感覚一般，物体一般の存在，数学はいずれも疑いの余地があり，絶対に確実な知識だとはいえないことになる。

素直な読者：どうも，そのようだ。

デカルト：では，絶対に確実に真なる知識から，感覚一般，物体一般の存在，数学を排除することにしよう。

素直な読者：そんなことをしたら，何も残らなくなってしまう。

デカルト：果たして，そうだろうか。私はこれまでいろいろなことを疑ってきた。ありとあらゆることを疑うことができるし，疑っている。この疑っている私の存在を疑うことはできるだろうか。疑っている私が存在しないかもしれないと疑うとしても，その疑っていることは確実だし，その疑っているものは何だろうか。この私ではないのか。疑っていることを疑うことはできないし，その疑っているものは私以外ではありえない。欺く神が存在するとして，その欺く神が私を欺いているとしても，私が疑っている限り，私が無であるということは絶対にありえない。私が疑っている限り，私は存在するのだ。

素直な読者：私もいろいろなことを疑ってきたし，最初，疑いの余地がないと思ったことも疑えることがわかった。でもいっさいが疑えるとしても，疑っていることを疑うことは不可能だ。結局，疑っていることになるからだ。そしてその疑っている私は存在することになる。

デカルト：その通り。こうして，徹底的な懐疑の結果，疑いの余地のない絶対に確実な真理に到達したことになる。それが，「私は考える，ゆえに私は存在する[11]」だ。疑うことは考えることだからね[12]。

素直な読者：「私は考える，ゆえに私は存在する」は，なるほど，疑いの余地がない絶対に確実な真理だ。

デカルト：では，この疑っている私はいったいどのように存在しているのだろうか。先ず，この私は疑っている（考えている）ときだけにしか存在しない。

素直な読者：疑っているときにだけしか存在しないというのはおかしい。私は生まれてから今までずっと存在し続けている。ぐっすり眠っているときにも，考えていないときにも存在しているはずだ。

デカルト：それは違う。これまでの議論を振り返ってみよう。疑っていないときには存在しないかもしれないと疑うことはできるだろう。だから，疑っていないときの私の存在は疑いの余地があるので，確実な知識からは排除しなければならない。さらに，この疑っている私には身体は存在しない。身体の存在も疑いの余地があるとして，排除したことを忘れないで欲しい。すなわち，疑っている（考えている）私の存在は連続的ではなく，身体ももたないことになる。しかも，この考えている私は，感覚，物体，数学等いっさいを排除した後でも存在しうるものであり，「存在するために他の何ものを要しないように，存在するもの[13]」なのだから，まさしく実体だということになる。

素直な読者：どうも，そうなるようだ。

デカルト：ではこれまでの懐疑の末に到達した結論を述べることにしよう。

> 私はひとつの実体であり，その本質ないし本性は考えるということだけにあって，存在するためにどんな場所も要せず，いかなる物質的なものにも依存しない。したがって，この私，すなわち，私をいま存在するものにしている精神は，身体〔物体〕からまったく区別され，しかも身体〔物体〕より認識しやすく，たとえ身体〔物体〕が無かったとしても，完全に今あるまま

---

10 『省察』，第一省察，33ページ。

11 『方法序説』，第四部，46ページ。『省察』では，「私は存在する，というこの言明は，私によって言表されるたびごとに，あるいは，精神によって概念されるたびごとに，必然的に真である，と論定されなければならない」とあり（第二省察，38ページ），『哲学原理』では，「われわれが何らかの仕方で疑い得る一切のことを斥け，かつ虚偽であると考えることによって，われわれはなるほど神も天も諸物体も存在せず，またわれわれ自らが手も足も，そしてついにはまったく身体をもたないと，想定することは容易であろう。しかしその故に，かようなことを思惟するわれわれが，無であるとは想定することはできない。というのは思惟するものが，思惟しているその時に存在しないことは不合理だからである。それ故に，「私は考える，ゆえに私は存在する」（ego cogito. ergo sum）というこの認識は，一切の認識のうち，誰でも順序正しく哲学するひとが出会う最初の最も確実なものなのである」とある（38ページ）。

12 「私は疑う，ゆえに私は存在する」あるいは，同じことですが，「私は考える，ゆえに私は存在する」，『真理の探究』，デカルト著作集4，白水社，327ページ。

13 『哲学原理』，第一部，人間的認識の諸原理について，五一，69ページ。

Akita University

のものであることに変わりはない。

すなわち，精神は物体とまったく切り離されて独立に存在する実体であり，精神は物体なくしてもそのままある，のだ。

素直な読者：同意せざるをえないことを認めよう。

デカルトの議論を踏襲すると、ダマジオが，デカルトの誤りだとした結論（物心二元論および精神の物質に対する優位説）を，疑いの余地のない絶対に確実な真理だとして認めざるをえないことになる。しかし，デカルトの議論のどこかに誤りはないのだろうか。次に，この問題を検討することにしよう。

Ⅳ．デカルトの議論の批判的検討

(1) デカルトの「私は考える，ゆえに私は存在する」について

どんな議論においても前提のない議論はありえず，デカルトの議論といえどもその例外ではない。デカルトの目的は，（疑いを差しはさむ余地のまったくない絶対に確実な）真理の探究であったが，その際，真は真であって偽ではなく，偽は偽であって真ではないという二値論理をデカルトは当然のこととして前提しているし，矛盾が偽であることも当然視している。すなわち，デカルトは，数学の確実性を疑っているにもかかわらず，論理学（当時の）は懐疑の対象にしていない。しかし，論理の確実性や議論の前提としての論理の身分といった問題があり，これについては後で若干考察することにしよう（さらに，デカルトはラテン語やフランス語といった有意味な言語が存在することや言語の理解可能性についても疑いを差しはさんではいないが，これについてはここではまったく検討しない）。

デカルトは，「私は考える，ゆえに私は存在する」は疑いの余地のまったくない絶対に確実な真理だと主張し，それを一切の知識の絶対的基礎とするべく「第一原理」と呼んだが，果たしてそうであろうか。デカルトの議論で確実に主張できることは，「疑っている（考えている）限り，疑っている（考えている）状態が存在する」ということだけではないか。確かに，『方法序説』におけるデカルトの言葉では，「私は考える，ゆえに私は存在する（je pense, donc je suis）」となっており，私が考えており，その考えている私が存在することになっている。しかも，その私の存在は，存在するために他の何ものも必要としないので，実体（精神的実体）だと，デカルトは主張する。

しかしながら，疑っているのがなぜ私だと言えるのだろうか。疑っているのは私だなどという自己同定（self-identification）は存在せず，ただ，疑っている，疑いが生じている，疑っている状態が存在しているだけということもあるのではないだろうか。

「私」という言葉を除外するならば，「考える」という言葉だけが残るので，デカルトのように，「私は考える，ゆえに私は存在する」という形式で述べる必要がなくなる。私を省略すると，「疑っている，ゆえに疑いが存在する」となるが，要するに，デカルトの議論から導かれることは，「疑いが生じている限り，疑いが存在する」ということになるだろう。

あるいは，疑いが生じているだけではなく，その疑いに気づいているということもあるかもしれない。その場合でも，その気づいているのが私だと断定することはできないだろう。私を除去した表現にすれば，「疑っていることに気づいている，ゆえに，疑いが存在する」とでもなろうか。しかし，この主張は成立するだろうか。この場合，疑いとその気づきは別物である。疑いが気づきの対象になっているが，その対象を間違って気づく可能性は否定できない。すなわち，疑っていないのに疑っていると気づいてしまう可能性がある。

一般化していえば，「何かに気づいている，ゆえに何かがある」とは言えないのである。したがって，「何かに気づいている，ゆえに，何かが存在する」とは単純に主張できないのであって，この場合でも，「気づき（意識）が生じている限り，気づき（意識）が存在する」ということになるだろう。ひとたび意識が出現（創発，emergence）すると，意識しているときには意識せざるをえない。われわれは，意識していないときに意識することもできないが，意識しているときに意識しないこともできない。意識しているときには意識は必ず存在しているとは確実に言えるだろう[14]。しかし，この意識の存在から何が導出できるというのだろうか。

通常，われわれは，何かに気づいている（意識している）のは私だとみなしている。私が意識しているというわけだ。さらに，私が意識していることも対象化し，意識するようになる。しかし，この意識の存在や自己意識の存在は，初めから存在していたわけではなく，突如，出現するように思われる。発達心理学的には，発達過程の中で，次第に人間は事物を意識するようになり，意識していることを意識するようになり，「あなた」や「私」

[14] 疑う余地のない絶対に確実な真理を求めて、懐疑を行うデカルトの議論では、「疑い」が不可欠だが、「疑い」を「意識」に置き換えても同様の議論になるだろう。「疑いが生じている限り、疑いが存在する」と同等の確実性をもって、「意識している限り、意識が存在する」とも主張できるのである。

Akita University

といった言葉を使用するようになる（自己意識，反省的意識[15]）。では，「私」という言葉やその言葉による自己認識はいかにして生まれたのだろうか。言語の存在が不可欠であることはもちろんだが，マルティン・ブーバーが主張するように，他者の存在が不可欠だと思われる[16]。ボーヴォワールの有名な言葉を借用し，言い換えると，「ヒトは私として生まれるのではなく，私になる」のではないだろうか。

これまでいろいろな可能性を述べてきたが，要するに，デカルトが第一原理だとみなした「私は考える，ゆえに私は存在する」という言明すら疑いの余地があり，したがって，デカルト自身の基準によると，この第一原理すら偽として排除せざるをえないのではないか，ということになるだろう。

(2) 第一原理に基づく証明について

百歩譲って，デカルトの第一原理を確実な真理と認めた場合でも，その後の議論の展開は順風満帆ではない。デカルトは，第一原理から，神の存在証明を試み，次にその神が誠実な神であって，欺く神ではありえないことを証明し，したがって，数学の確実性や物体の存在，さらには物体のもつ諸性質についての明晰・判明な知識が絶対に確実な真理であることを証明しようとし，しかも，証明に成功したとデカルト自身は考えた。さらにデカルトは壮大な宇宙論の体系すら構築し，それを確実な真理とみなした。しかしながら，ここでは割愛するが，デカルトによる神の存在証明，すなわち，いわゆる，神の存在論的証明は成功していないという批判がある。すなわち，批判がある以上，ここでも，疑いを差しはさむ余地があることになる[17]。したがって，デカルト自身の真偽の判定基準によれば，デカルトによる神の存在証明を受容することはできない。デカルトは，神の存在を証明し，次の神の誠実さを証明することによって，数学の確実さを証明し，さらには物体の存在だけではなく，物体のもつ幾何学的諸性質の確実さも証明しようと試み，彼自身としては，それに成功したとみなしたのだが，神の存在証明に疑いの余地があるとすれば，それ以降のデカルトの証明の試みについても疑いの余地があると言わざるをえない。したがって，かりに第一原理が確実に真であるとしても，そこからわれわれは一歩も先に進めないことになる。要するに，デカルトのような間違った懐疑を推し進めると，その結果は，せいぜい第一原理だけというひじょうに貧弱な哲学体系になってしまうのである。

V．デカルトとは異なる議論の展開

Ⅲにおいて，デカルトの議論をデカルトと素直な読者の対話の形式で展開し，デカルトの議論を踏襲すると，ダマジオがデカルトの誤りだと指摘する結論に導かれることをみてきた。そこで，今度は，Ⅳで行ったデカルトの議論の批判的検討を踏まえて，Ⅲにおける議論とは異なる議論の展開が可能であることを示そうと思う。筆者は，「ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部，絶対的に誤りとして廃棄すべき」だというデカルトの懐疑がそもそも間違っているとみなしており，その結果，第一原理だけという貧弱な体系になってしまったのだと考えている。素直な読者には退場をお願いして，今度は，筆者のような天邪鬼な読者に登場してもらおう。

デカルト：疑いを差しはさむ余地のまったくない絶対に確実な真理の探究のためには，「ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部，絶対的に誤りとして廃棄すべき」である。このような懐疑の過程を経た結果として，どこにも疑いを差しはさむ余地のないものが残るかどうかを見極めることにしよう。

天邪鬼な読者：疑いの余地があるものすべてを偽として排除するというやり方はいかがなものか。偽の可能性があることイコール偽ではない。逆に，疑いの余地がないと主観的にいくら確信したとしても，それが偽であるこ

---

15 哲学では，意識といえば，どうも高次（？）の，「自己意識（反省的意識）」が考察されるが，医学では，「覚醒的意識」が問題とされ，しかもそれには覚醒の水準があり，言語的刺激で容易に覚醒するか，物理的刺激（痛覚）でないと覚醒しないか，物理的刺激でも覚醒しないか，などの基準によって判定されている。例えば，反射も消失するほどの昏睡状態（coma）では生きてはいるが，意識はないと判断される。後者の意味では，当然，イヌやゴキブリにも意識（心）があることになる。山鳥重，『ヒトはなぜことばを使えるか：脳と心のふしぎ』，講談社現代新書，161－2ページ。

16 マルティン・ブーバー，「<われ>はそれ自体では存在しない。根源語<われ－なんじ>の<われ>と，根源語<われ－それ>の<われ>があるだけである」，『我と汝・対話』，岩波文庫，8ページ。

17 疑いの余地があると主張するだけでは批判にはなりえないので，批判と懐疑は異なるが，懐疑なしに批判は始まらない。したがって，批判があるということは疑いの余地があるということである。デカルトによる神の存在論的証明に対する徹底的な批判を行ったのが，カントである（『純粋理性批判』）。筆者は，カントの議論の方が妥当だと思っているが，この検討については，拙稿，「神の存在／非存在を巡って」，『秋田大学教育学部研究紀要，人文科学・社会科学』，第47集，1995年，1－12ページ，を参照されたい。デカルトの存在論的証明をアリストテレスがすでに論駁していたという指摘もある。「その本質が存在することであるようなものは何も存在しない。なぜなら，存在するようなものの類は存在しないからである」，『分析論後書』，92b12－18。

Akita University

ともありうる。私はその立場から，あなたの議論を批判的に検討させてもらうことにする。それでも良ければ，あなたの議論につきあってもいいが。

デカルト：仕方がない。あなたの立場も尊重しよう。疑うといっても，ありとあらゆる個別的な事柄を疑っていくことにしたら，きりがないだろう。例えば，赤いとか白いとかの個々の感覚（視覚），冷たいとか暖かいとかの個々の感覚（触覚），甘いとか苦いとかの個々の感覚（味覚）などひとつひとつを取り上げて，疑いの余地があるかどうかを検討していくことは不可能にちがいない。

天邪鬼な読者：この点は同意してもいい。

デカルト：では，個々の感覚ではなく，感覚一般を検討することにしよう。感覚はときどきわたしたちを欺くので，感覚はつねに正しいとは限らない。錯覚があるように。

天邪鬼な読者：感覚が欺くことは事実だ。

デカルト：では，感覚は疑いの余地があるのだから，感覚は絶対確実に真だとは言い切れない。感覚を排除することにしよう。

天邪鬼な読者：異議あり。感覚がときどきわたしたちを欺くからといって，すべての感覚が錯覚で，偽だとはいいきれない。すべての感覚を排除することには反対だ。むしろ，錯覚と錯覚でないものをできる限り識別しようと努力することの方が大事ではないか。

デカルト：感覚について，同意してもらえないようだ。では，物体の存在はどうだろうか。ここでも個々の物体をひとつひとつについてそれが存在するかどうかと疑っていったら，きりがないので，物体一般を検討することにしよう。幻覚では，存在しない物体が見えたりする。われわれが本当に存在すると思っていることが絶対に幻覚ではないとは言い切れない。あるいは，睡眠時の夢に登場する人物や物体は，本当は存在していない。眠っておらず，目が覚めているときに見る物体は本当に存在すると普通は，思っているが，覚醒時の現実世界が夢なのかもしれない。

天邪鬼な読者：夢と現実は違う。夢の中の物体は存在しないとしても，現実の世界の物体は存在する。

デカルト：私は現実世界が夢だとは断定していない。夢かもしれないと疑っているのだ。「覚醒は睡眠からけっして確実な標識によって区別されることはできない」からだ。覚醒時の現実世界が絶対に夢ではなく，現実世界の物体は確実に存在し，その存在を絶対に疑うことはできない，と断定できるかね。

天邪鬼な読者：それはできない相談だ。夢かもしれないと疑うことは私にもできる。しかし，夢の可能性があるからといって，物体の存在を排除してしまうのは行き過ぎだ。夢ではない可能性もあるからだ。先ほど，疑いの余地があるとして感覚を排除しようとしたことに私は反対した。ここでも同様のことが言える。覚醒時の現実世界もすべてが夢であり，夢の中の物体が存在しないのと同様に，覚醒時に認識する物体が存在しない，とはいいきれない。すべてが夢だとして物体を排除することには反対だ。むしろ，夢と覚醒時の現実をできる限り区別しようと努力することの方が大事ではないか。

ところで，これまでの考察ですっかり排除されたわけではない感覚と物体（身体）の関係を考察してみよう。われわれが普通，存在しているとみなしている物体が幻覚や夢であって，存在しない可能性があることは認めよう。しかも，眼を閉じれば，見えていた物体が見えなくなり，再び眼を開くと物体が見える。もしかすると眼を閉じると同時に物体が消滅し，眼を開くと同時に物体が再び出現するのかもしれない。しかし，あなたは眼を開いたままで，眼前のすべての物体を見えなくしたりできるだろうか。私にはできない。視覚は眼なくしてありえるのだろうか。われわれは眼で見るのだ[18]。眼は延長（extensio）をともなっており，身体に備わっているのではないか。また，あなたが眼を閉じるとき，筋肉を動かしているのではないか，筋肉なくして眼を閉じたり開いたりできるだろうか。私は不可能だと思う。何かを見たり，触れたりする際，筋肉を動かしているとすれば，少なくとも筋肉が備わっている身体は存在するのではないか。そもそも感覚器官も身体に備わっている。疑いを差しはさむ余地があるという意味では，身体の存在は絶対確実とはいえないかもしれないが，むしろ，身体や感覚の存在を暫定的にせよ認めたうえで，物体や精神等に関する知識の探究をすべきではないだろうか。

デカルト：物体の存在の排除についても同意が得られないようだ。では，数学（代数や幾何）はどうだろうか。ここでも個々の計算や個々の図形の性質を取り上げて検討してもきりがないので，一例を挙げて検討し，その考察を数学一般の考察ということにしよう。

天邪鬼な読者：数学（代数や幾何）の基礎には論理学が

[18] ホワイトヘッドは，デカルトに対してではないが，デカルト以上に徹底的な懐疑を行い，精神的実体と物質的実体の両方を退け，印象（impression）だけを疑いの余地のない確実なものとして認めたヒュームに対して，この点を指摘して，ヒュームは，視覚が「眼によって」起こるという，ヒュームも含まれるすべてのひとの真の確信（real conviction）を放棄したかのようなみせかけのふり（make-believe）をしていると批判している。Alfred North Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, The Free Press, 1978, pp.170-1.

Akita University

ある。あなたの目的は絶対に確実な真理の探究だったが，その際，真理と虚偽（偽）を明確に区別しているのではないか。すなわち，真は真であって偽ではなく，偽は偽であって真ではないと。真だとみなされたことが，偽と判明することはあるとしても，真であるものが偽になったり，偽であるものが真になったりすることはあるのだろうか。また，矛盾が偽であることも当然視しているようだが，それなら，矛盾命題の否定は必然的に真になるのではなかろうか。例えば，「２たす３は５でありかつ２足す３は５ではない」，Ｐ・－Ｐという言明は矛盾しているので偽だとすれば，その否定命題である，「２足す３は５でありかつ２足す３は５ではない，ということはない」，－（Ｐ・－Ｐ）という言明は，絶対確実に真になるはずだ。矛盾（排除）律の妥当性を拒否したら，あなたが行おうとしている懐疑や批判，議論や論証，真理の探求はそもそも可能なのだろうか。

デカルト：私は数学を取り上げるつもりだったが，論理学でもかまわない。真と偽の二値論理や矛盾（排除）律をわれわれは当然視しているが，本当は二値論理や矛盾（排除）律は間違っているにもかかわらず，欺く神がいて，すべての人間を欺いているのかもしれない，とは考えられないだろうか。本当は，「２足す３は５でありかつ２足す３は５ではない，ということはない」という命題は真ではないにもかかわらず，真だと思い込まされているのかもしれないと。

天邪鬼な読者：そんなバカな。欺く神などいるわけがない。どこに存在すると言うのだ。

デカルト：私は欺く神が存在するなどと断定してはいない。存在するかもしれない，と疑っているのだ。欺く神など絶対に存在しないと断定できるかね。

天邪鬼な読者：絶対に存在しないとは言い切れない。存在するかもしれないと想像することはできる。

デカルト：もし欺く神が存在したら，「２足す３は５でありかつ２足す３は５ではない，ということはない」という言明は真ではないかもしれないということになるね。疑いを差しはさむ余地がある以上，「２足す３は５でありかつ２足す３は５ではない，ということはない」という言明も絶対確実に真ではない。

天邪鬼な読者：ちょっと待った。最後の主張はとうてい，受け入れることはできない。疑いを差しはさむ余地があるという理由では，「２足す３は５でありかつ２足す３は５ではない，ということはない」という言明も絶対確実に真ではない，とは言い切れないからだ。何度も言っているように，疑いの余地があることイコール偽である，とか，偽の可能性があることイコール偽である，という考えがそもそも論理的に間違っている。しかも，あなたは，やはり，真は真であって偽ではなく，偽は偽であって真ではないという論理学の基本的考え（二値論理）を前提しているようだが，疑いを差しはさむ余地があるとして，この前提を排除できるだろうか。疑いの余地のない確実な真理として認めざるをえないのではないか。

さらに言えば，命題や理論の偽を主張する場合には，疑いの余地があるとか，偽の可能性があるという指摘では不十分なのであって，具体的にどこが偽であるのか，あるいはどこに矛盾があるのかを具体的に指摘しなければ，議論に基づく真理の探究などできないはずだ。

デカルト：この点についても意見の一致がみられないようだ。それでは，疑いの余地がない確実に真なるものを提案することにしよう。これについては，同意してもらえるはずだ。私はこれまでいろいろなことを疑ってきた。ありとあらゆることを疑うことができるし，疑っている。しかし，この疑っている私の存在を疑うことはできるだろうか。疑っている私が存在しないかもしれないと疑うとしても，その疑っていることは確実だし，その疑っているものは何だろうか。この私ではないのか。疑っていることを疑うことはできないし，その疑っているものは私以外ではありえない。欺く神が存在するとして，その欺く神が私を欺いているとしても，私が疑っている限り，私が無であるということは絶対にありえない。私が疑っている限り，私は存在するのだ。

こうして，徹底的な懐疑の結果，疑いの余地のない絶対に確実な真理に到達したことになる。それが，「私は考える，ゆえに私は存在する」だ。疑うことは考えることだからね。

天邪鬼な読者：果たしてそうだろうか。疑っているのがなぜ私だと言えるのか。疑っているのは私だなどという自己同定は存在せず，ただ，疑っている，疑いが生じている，疑っている状態が存在しているだけということもあるのではないだろうか。

「私」という言葉を除外するならば，「考える」という言葉だけが残るので，あなたのように，「私は考える，ゆえに私は存在する」という形式で述べる必要はない。私を省略すると，「疑っている，ゆえに疑いが存在する」となるが，要するに，あなたの議論から導かれることは，「疑いが生じている限り，疑いが存在する」ということになるだろう。

あるいは，疑いが生じているだけではなく，その疑いに気づいているということもあるかもしれない。その場合でも，その気づいているのが私だと断定することはできないだろう。私を除去した表現にすれば，「疑っていることに気づいている，ゆえに，疑いが存在する」とでもなろうか。しかし，この主張は成立するだろうか。こ

Akita University

の場合，疑いとその気づきは別物である。疑いが気づきの対象になっているが，その対象を間違って気づく可能性は否定できない。すなわち，疑っていないのに疑っていると気づいてしまう可能性がある。

一般化していえば，「何かに気づいている，ゆえに何かがある」とは言えない。したがって，「何かに気づいている，ゆえに，何かが存在する」とは単純に主張できないのであって，この場合でも，「気づき（意識）が生じている限り，気づき（意識）が存在する」ということになるだろう。

ひとたび意識が出現すると，意識しているときには意識せざるをえない。われわれは，意識していないときに意識することもできないが，意識しているときに意識しないこともできない。意識しているときには意識は必ず存在しているとは確実に言えるだろう。しかし，この意識の存在から何が導出できるというのだろうか。

通常，われわれは，何かに気づいている（意識している）のは私だとみなしている。私が意識しているというわけだ。さらに，私が意識していることも対象化し，意識するようになる。しかし，この意識の存在や自己意識の存在は，初めから存在していたわけではなく，突如，出現するように思われる。発達心理学的には，発達過程の中で，次第に人間は事物を意識するようになり，意識していることを意識するようになり，「あなた」や「私」といった言葉を使用するようになる（自己意識，反省的意識）。では，「私」という言葉やその言葉による自己認識はいかにして生まれたのだろうか。言語の存在が不可欠であることはもちろんだが，マルティン・ブーバーが主張するように，他者の存在が不可欠だと思われる。ボーヴォワールの有名な言葉を借用し，言い換えると，「ヒトは私として生まれるのではなく，私になる」のではないだろうか。

これまでいろいろな可能性を述べてきたが，要するに，あなた(デカルト)が第一原理だとみなした「私は考える，ゆえに私は存在する」という言明すら疑いの余地があり，したがって，あなた自身の基準によると，この第一原理すら偽として排除せざるをえないのではないか，ということである。

しかし，私はあなたの基準を採用しないので，偽として排除することはしない。ある一定の年齢に達すると，われわれは身体や物体を意識するようになり，意識していることを意識するようになり，「私」といった言葉を使用し，その意識しているのは私だとみなすようになる。少なくとも，私はそうである。しかし，その私は，身体のない私だとか，疑っているときにだけ存在するのだなどと断定はできない[19]。身体なくして感覚がないように，身体や感覚なくして意識もないのではないか。あるいは，言語なくして，考えているのは私だとか，意識しているのは私だという自己意識は存在しないのではないか。意識は感覚する身体，脳を備えた身体に後から出現するのではないか。あなたの定義では，実体は，「存在するために他の何ものを要しないように，存在するもの」だが，私（意識，自己意識，精神）は初めから存在していたわけではないし，もし身体なくして精神が出現することがないとすれば，私は実体ではない。したがって，あなたが導き出そうとした，物心二元論の結論だけが成立するわけではない。

こうして，議論の末，ふたつの相容れない結論が残ることになる。

デカルトの結論：精神は物体とまったく切り離されて独立に存在する実体であり，精神は物体なくしてもそのままある。

天邪鬼な読者の結論：精神は物体とまったく切り離されて独立に存在するとはいいきれず，したがって，実体とみなすことはできない。精神は物体なくしてもそのままあるともいいきれない[20]。

Ⅵ. デカルトの物心二元論が受容された背景：ギリシア哲学と対決した聖書的伝統

デカルトの結論と天邪鬼な読者の結論のどちらが説得的だと思うだろうか。まえがきで言及したように，今日でも，世界人口の半数が唯一神論者である。ユダヤ教，キリスト教，イスラム教の伝統では，この唯一神は，非物質的（immaterial）で，非有形的（incorporeal）で，不滅な（immortal）神，純粋な精神・霊（spirit）であって，世界を無から創造した唯一の超越的で自存的な存在だということになっている。

中世のカトリック神学を支えたアリストテレス＝トマ

[19] 私が全身麻酔を受けると，ある一定期間，まったく意識を失い，その間の記憶もいっさいなく，主観的にはその時間すら存在しないといったことが生じるが，その間，私（私の身体）は存在しなくなり，意識を回復すると，再び存在するようになるというのだろうか。

[20] 本稿の結論は，デカルトの主張の否定という消極的なものであり，積極的な主張にはまったくなっていない。ポパーはデカルト的な二元論，相互作用説をエクルズと共に唱えたとされるが，私見では，ポパーとエクルズは決定的に異なり，ポパーは二元論というより，ブンゲの創発的唯物論（emergent materialism）と相違がないように思われる。いずれにせよ，今後の課題である。

Akita University

ス的伝統によれば，実体（ousia, substantia, substance）とは「それ自身で存在する存在者（entity）で，主語となる別の存在者の中にはない存在者」である[21]が，それは神に他ならない。すでに引用したように，デカルトの実体概念もこの伝統に沿っており，実体とは「存在するために他の何ものも要しないように，存在するもの」だと述べている。さらに，デカルトは精神と物質の両方を実体（しかも，まったく異質のふたつの実体）だとみなして，物心二元論，さらには精神の物質に対する優位説を主張したが，実は，『哲学原理』では，「まったく何ものをも要しない実体とは，たしかにただひとつ，即ち神しか理解されえない」ことを率直に認め，他のすべての実体（精神的実体と物質的実体）は，ただ神の協力によってのみ，存在し得ると述べている[22]。すなわち，デカルトの物心二元論および精神の物質に対する優位説は，結局のところ，カトリックの伝統と軌を一にする[23]。

神は非物質的・非有形的な「純粋精神・霊（pure spirit）」で，その精神こそが永遠に不滅な（immortal）真の実体であって，その精神は当然，物質的基盤などいっさいなしに存在しうるとか，あるいは，むしろ，物質の方が被造物に過ぎず，物質は精神なくして存在しえないものだというカトリックの見解は，『聖書[24]』を文字通りに解釈する限り，『聖書』にはなかった見解である。『聖書』の，天地創造の箇所は次の通りである。できる限り，直訳すると，

> 神が天と地を創造した（バーラー）その当初，地は空っぽ（トフー・ヴァヴォフー）だった。闇が深淵（テホーム）のうえにあり，神の霊（ルアッハ・エロヒーム）が水（マイム）のうえを漂っていた[25]。（創世記１：１－２）

地は空っぽでなにもなかったと主張しながら，他方では，テホーム（海）や水（マイム）の存在が明確に述べられている[26]。文字通りには，地は空っぽでなにもなかったのかもしれないが，それ以外のところには海や水があったと考えるのが自然である。すなわち，「無からの

---

[21] *A lexicon of St. Thomas Aquinas : based on The Summa Theologica and selected passages of his other works*, by Roy J. Deferrari and M. Inviolata Barry ; with the technical collaboration of Ignatius McGuiness, Reproduced from the original edition, Rinsen Book Co., Kyoto, p. 1063-4.実体概念の起源は，イオニア自然哲学の万物の根源（arche, principle） — 水，無規定なもの（apeiron, the indefinite），空気，火，等 — に遡る。また変化の問題 — 事物Xが変化するならば，変化の始めと終わりとでは，当然，同じXではなくなる。他方，変化する間中ずっとXでなければ，Xが変化しているとは言えず，変化の始めも終わりも同じXのままでなければならない，したがって，前者の主張と後者の主張は矛盾するようにみえるが，それをどう解決するかという問題 — に対する競合する答えでもあった。変化の過程において，変化するものの根底にあって，自らは不変で自己同一を保ちながら，変化する諸性質を担うものが存在し続けるとされ，その担い手が基体（hypokeimenon, substratum, subject）と呼ばれる。『形而上学』，983b6-18参照。アリストテレスは，その基体が真の実体と考えられていることを，指摘している。「実体という語は，それより多くの意味においてではないにしても，すくなくとも主としてつぎの四つの意味で用いられている。すなわち，(1) ものなにであるか〔本質〕と，(2) 普遍的なもの〔普遍概念〕と，(3) 類とが，それぞれの事物の実体であると考えられており，さらに第四には，(4) それぞれの事物の基体がそれの実体であると考えられている。ところで，基体と言うのは，他の事物はそれの述語とされるがそれ自らはけっして他のなにものの述語ともされないそれ〔主語そのもの〕のことである。それゆえに，まず第一にこれの意味を規定しておかねばならない。なぜなら，事物の第一の基体が最も真にそれの実体であると考えられているから」，『形而上学』，1028b34-1029a1（傍点引用者）。1017b10-13も参照。ここには世界の存在構造とギリシア語の文法構造との一致が見てとれる。実体（基体）＝属性の関係と主語＝述語の関係とが対応する。主語にのみなって，述語にならないもの，という規定が生じるのはこのためである。この実体概念が，「それ自身で存在するもの」へと歴史的に変遷していく。変化する性質，属性は基体なくしては存在しえないが，それに対し，基体は，それ自身で存在するものだからである。

[22] 『哲学原理』，69ページ。

[23] デカルトの哲学の試みとカントの倫理学の試みは，対象は異なるがきわめて類似している。デカルトは理性を使用して，物心二元論および精神の優位説を論証しようとしたが，それは結局のところ，カトリックの教義と合致するように考案されており，カントは理性を使用して，定言命法に基づく道徳法則を樹立しようとしたが，それは結局のところ，『聖書』で神が命じた道徳規則と合致するように考案されているのである。

[24] ここで言及されている『聖書』というのは，キリスト教における『旧約聖書』（ユダヤ教では，『タナハ』ないし『ミクラー』，あるいは単に『聖書（キトゥヴェイ・ハコデシュ）』と呼ばれる書物）のことである。『新約聖書』は，ヘレニズム化以降の作品なので，当然，ギリシア哲学の影響をすでに受けているであろう。

[25] 「トフー・ヴァヴォフー」のヴァは「そして」という意味なので，トフーとボフー（ヴァを伴うとボの発音がヴォに変化する）の二語になるのだが，トフーもボフーも実は意味がよくわかっていない単語である。現在の言語学的推定によれば，「空虚，空っぽ」を意味すると推定されている。普通，深淵と訳されるテホームは，アッカド語のtamutuやウガリット語のthmと関係があるとすれば，「海」を意味するようだ。池田潤。『ヘブライ語のすすめ』，ミルトス社，186-8ページ。ルアッハは，もともと「息，風，空気」を意味する単語である。

[26] この水（マイム）は古代ギリシアの自然哲学では，万物の根源（アルケー）ないし質料（ヒュレー）に相当する原初的物質・素材とみなすことができよう。自然哲学の祖といわれるタレスにあっても，アルケーは水であった。

Akita University

創造」とはほど遠い記述である[27]。

さて，人間創造の箇所は，次の通りである。

> 主なる神は土（アダマー）の塵で人間（アダム）を作り（ヤーツァール），その鼻に命の息（ニシュマット・ハイム[28]）を吹き入れた。すると人間（アダム）は生きもの（ネフェシュ・ハヤー）となった。（創世記２：７）

「ネシャマー」という言葉も，「ルアッハ」と同様，もともと「息」を意味する言葉である。聖書の記述はひじょうに素朴で，生きものは息（呼吸）をすることによって生きており，息（呼吸）をしなくなったら死ぬという日常の体験を反映している。ルアッハをもつ神[29]も生きている存在だが，神が自分の命の息を吹き入れることで，土から作られた人間は生きものになったのである。土塊（アダマー）はそもそも呼吸をせず，生きものではない。文字通りに解釈すれば，ネシャマーもルアッハも，非物質的な純粋精神・霊というよりもむしろ，空気のように目には見えないものの，マイムと同様，原初的な物質とみなす方が自然である。但し，太陽や月や大地，石ころのような単なる物質ではなく，生命を生み出す素材のようではあるが。すなわち，『聖書』で文字通りに表現されている思想は，ひじょうに素朴で原始的な物語（story）である。

しかしながら，アレクサンダー大王（前356～323年）によるオリエント世界の征服およびヘレニズム化政策により，ユダヤ人や非ユダヤ人キリスト教徒は，ギリシア哲学と出会うことになる。先に言及した，神は非物質的・非有形的な「純粋精神・霊（pure spirit）」で，その精神こそが不滅な真の実体であって，その精神は当然，物質的基盤などいっさいなしに存在しうるとか，あるいは，むしろ，物質の方が被造物に過ぎず，物質は精神なくして存在しえないものだというカトリックの見解が生まれえたのはその結果である。主として，古代自然哲学のひとつ，アトミズム（唯物論）との対決によるものと筆者は推測している[30]。

自然哲学の伝統では，何が真に存在するのかという問いが論じられたが，それに対する多様な回答の中で首尾一貫した強力な答えがアトミズムであった。アトミズムによれば，生成してくるもの，消滅するもの，変化するもの，作り出されるもの，破壊されるものは二次的・派生的な存在であって，真の存在とは言えず，不変化（unchangeable）で，分割不可能（indivisible）で，破壊不可能（indestructible）で，不滅（immortal）なアトム（物質）こそが，真に存在する実体（基体）だと主

---

27 「無からの創造」の主張と解釈される箇所は，旧約外典，マカビー第二書，７章28節である。「わが子よ，なんじの眼を天と地とに向け，そこにあるすべてのものを見，神は存在する物より，これらの物を造りたまわざることを思え」と（傍点引用者）。この書物には，前２世紀，セレウコス朝シリアのアンティオコス・エピファネスの治世が記されているので，その書物の成立はそれ以降であり，当然，ヘレニズム化された後のユダヤ人の考え方が反映されている。「無からの創造」の主張として，詩編33章６節が言及されることがあるが，文字通りに解釈すれば，無からの創造ではありえない。神の「口の息（ルアッハ・ペー）」 ― 原文では，神が所有格になっているので，ルアッハ・ピーヴ（その（神の）口の息）となっている ― によって創造されているからである。

28 単語の後ろに名詞のハイムがあるので，ニシュマットと語尾が変化しているが，単独では，ネシャマーである。

29 『聖書』では，神にも身体があると解釈できる箇所が多くあり，神自体の非物質化，非有形化の試みも後世のものである。一例を挙げると「イスラエルには，再びモーセのような預言者は現れなかった。主が顔（パニーム）と顔（パニーム）を合わせて彼を選び出された」（申命記43:10）。

30 ピュタゴラス（前570頃～）の「数」，プラトン（前427～347年）の「イデア」，アリストテレス（前384～322年）の「形相」や「不動の動者」は，神と折り合いをつけることが比較的容易である。それに対し，アトミズムは強敵である。アトミズムの創始者はレウキッポスだが，その説はソクラテスの同時代人，デモクリトス（前460頃～370頃）によって伝えられ，さらに，エピクロス（前341頃～270頃）がそれを受け継ぎ，そのエピクロスを師とするエピクロス派は，その後，無神論者の代名詞となった。カトリック支配が確立した後，アトミズムは近代になって復活するまで徹底的に排除され，無視され続けてきたことからも，その敵対的・競合的関係が伺えよう。ギリシア哲学と出会い，ギリシア哲学と対決し，あるいは利用しながら，創世記を独自に解釈（寓意的解釈）し，キリスト教教父による聖書解釈にも決定的な影響を与えた，アレクサンドリアのフィロン（前13頃～54頃）の『世界の創造』が筆者の推測を裏書きする有力な証拠となる。フィロン曰く「「世界の創造者」よりむしろ世界の方を賛美する輩がいて，彼らは，「世界は不生かつ永遠である」と主張し，不敬にも「それに対し神は極度の無為に陥っている」と虚言を弄したからである」と（12ページ）。これに対する翻訳者の注もとても参考になる。「ここで念頭に置かれているのは，アリストテレスを初めとするペリパトス派やエピクロス派の考え方であろう」と（70ページ）。アレクサンドリアのフィロン，『世界の創造』，野町啓・田子多津子訳，教文館。因みに，世界の永遠性を唱えたアリストテレスの思想は「無からの創造」とは相容れないにもかかわらず，アリストテレスが神学に利用されていくのは実に奇妙なことだということも指摘しておきたい。ユダヤ教の伝統では，ここに言及したフィロンは両立不可能性に気づいているし，中世のユダヤ人思想家マイモニデス（1135～1204年）も両立不可能性を明確に指摘しているというのに。Moses Maimonides, *The Guide of the Perplexed*, Translated by Shlomo Pines, University of Chicago Press, Vol. II, pp. 239-254. 因みに，マイミニデスの議論は，カントのアンティノミーの議論を先取りしたものとみなすことができる。

Akita University

張された。アトムこそが真に存在する究極の物質，質料（matter，materia，hyle[31]）でそれ以外にはそれ自体としては何も存在しないことになる[32]。アトミズムによれば，『聖書』の創造物語に登場する，マイム（水），アダマー（土），さらにはルアッハ（息，風，空気），ネシャマー（息）もすべて，アトムからできているものにほかならず，二次的・派生的な存在にすぎないのである。

『聖書』の唯一神やその神による世界創造を擁護する者は，（アトムが存在すると仮定した場合でも）その究極的物質，あるいはそれ以外の質料（アリストテレスにおいては四元素）すら創造されたものであり，したがって，派生的・二次的な存在であると主張せざるを得ず，また，神を非物質化，非有形化し，神は完全に純粋な精神・霊であり，しかも，これこそが他の何ものにも依存せずにそれ自体で存在する究極の存在であることを主張しなければならなかったのだと思われる。さもないと，神（精神・霊）すら，物質的な原理によって部分的にせよ説明されることになり，物質に依存することになってしまうからである。また，精神・霊（魂）は不滅（不死）でなければならない。さもないと，破壊不可能（indestructible）で，不滅（immortal）なアトムに太刀打ちできないからである。ヘレニズム化以降，ユダヤ教徒やキリスト教徒は，ギリシア哲学と出会い，対決し，利用することによって，『聖書』を文字通りにではなく，寓意的に解釈する伝統が生まれたのであろう[33]。デカルトの物心二元論はこの伝統に合致するように巧妙に構築されている[34]。

---

31 ラテン語のmateriaもギリシア語のhyleも，そのもともとの意味は「木」であった。人間は木を材料にして，椅子や机などいろいろな事物を作るからであろう。哲学的議論を経て，一切のものの材料，素材である「質料，物質」を意味するようになったのである。

32 エピクロスの言葉とされる有神論に対する否定的結論に次のものがある。「物体と空虚のほかには，完全な実在として把えられるものであって，それの偶有性や属性と言われるものとして把えられるのではないものは，想像によってであれ，想像されたものの類比によってであれ，何ひとつ考えることはできない」（234ページ），「天空における（諸天体）の運行や回帰，（太陽と月）の蝕，昇りと沈み，およびこれらにつながる一連の現象が起こるのは，何かあるもの（神）がそれらのことに手を貸していて，現在も将来もその秩序を整えているからであり，しかもそのものは同時にまた，不滅性とともにまったき至福を享受しているのだ，というふうに考えてはならない」（262－3ページ）。ディオゲネス・ラエルティオス，『ギリシア哲学者列伝』，下巻，岩波文庫。傍点は引用者。アリストテレスは原子論者ではないが，かれの質料（hyle）も不生不滅なので，アリストテレスの世界も永遠の存在であり，「無からの創造」を唱えるカトリックの伝統と衝突する。アリストテレス，『形而上学』，999b12-17。注30も参照。

33 アレクサンドリアのフィロン，アウグスティヌス，マイモニデス，トマスらによるこのような寓意的解釈は明白に後知恵（hindsight）に過ぎず，アドホック（ad hoc）で秘密裡（surreptitious）の変更である。先に言及した，フィロンの『世界の創造』を一読すれば，こじつけの解釈，牽強付会で満ち溢れていることがわかるだろう。まるで，『古事記』や『日本書紀』の国生みの記述を西洋哲学や科学の概念を用いて再解釈し，しかもその解釈に基づく思想が『古事記』や『日本書紀』の本来の思想だなどと主張するようなものである。

34 この伝統は西洋世界では根強く残っており，人間は機械にほかならないという人間機械論を唱えたとされる18世紀を代表する唯物論者，ド・ラ・メトリ（1709－1751）ですら，非物質的な純粋精神である唯一の創造神の存在について，控えめな発言を行っている。「予が至高存在を疑惑の俎上にのぼせているという意味ではない。それどころか，どうやら，この存在には最高度の可能性が与えられているように予には思われるのである。・・・物質が永遠であるか，それとも創造されたものであるか，ないしは，神があったか，それともなかったか，そんなことはわれわれの安心立命のためにはどうでもよいことである。（85－86ページ）・・・以上が賛否両論の意見であり，永遠に哲学者を二つの陣営に分っている大理由の要約である。著者はどちらにも味方しない。」（90ページ），『人間機械論』，岩波文庫。

20世紀になっても，カトリック信者で，ノーベル賞を受賞した神経生理学者であるエクルズは，ポパーとの共著『自我と脳』の二人の対話の中で，自己意識をもった心（self-conscious mind）の死後の存続，不滅（immortality）について，ポパーの同意を得ようと執拗に試みている（ポパーは同意しなかったが）。 Karl R. Popper & John C. Eccles, *The Self and Its Brain*, Springer International, 1981, pp.552-8.